國學院大學学術情報リポジトリ

『和泉式部日記』の負性：主人公と帥宮の周辺をめぐって

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 副島, 和泉
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001476

『和泉式部日記』の負性
―主人公と帥宮の周辺をめぐって―

副島和泉

論文要旨

キーワード
『和泉式部日記』・負性・故宮・北の方・推進力

「負性」という言葉を、「主題や表現に関わるプラスの推進力」を加速させる、文学が成り立つための「負」の要素として捉えたとき、『和泉式部日記』にこの概念をあてはめ、主人公の側からの視点で伝えられる帥宮との恋を「正」と措定してみると、この日記がいかに多くの「負」の要素に支えられているかが浮き彫りとなるだろう。

小論では、『和泉式部日記』の「負性」の対象となり得る登場人物の中で、故宮と北の方を取り上げ、分析を試みる。なぜ、この作品の作者は、独自の視点の方法を用いて、和泉式部と敦道親王の恋の十ヶ月間を「日記」として書き残したのであろうか。先に述べた分析を通して、この作品の「負性」が、主人公と帥宮の恋の機軸となっていることを解き明かす。

一　『和泉式部日記』の負性

『和泉式部日記』（以下、『日記』[1]）は、主人公和泉式部（以下、「主人公」）と帥宮敦道親王（以下、「帥宮」）の恋を主軸として描いた作品である。たとえ、主人公不在の場面が描かれているとしても、それは二人の恋を描くのに必要なエピソードとして添えられている。だが、そうした場面を「添えられている」なり、「超越的視点[2]」なりといった見方で捉えることは、あくまでも主人公寄りの論理に過

ぎないのではないだろうか。

そこで、その偏りを取り除いてみるために、小論では「負性」という観点から作品を眺めてみたい。負性とは、「主題や表現に関わるプラスの推進力」を加速させる、文学が成り立つための「負」の要素である[3]。それを『日記』にあてはめてみると、この作品がいかに多くの「負」の要素に支えられたものであるかが見えてくる。『日記』が主人公と帥宮の恋の成就を描くためのものだとすれば、そこにはその阻害要因たる故宮為尊親王（以下、「故宮」）の存在、主人公の多情な恋の噂、帥宮への乳母の諫言、帥宮の主人公以外の恋人への代詠、北の方の存在など、多くの「負」のエピソードが見出される。また、二人が「忍ぶ恋」の形で関係を育くまざるをえなかったのも、これらの「負」の障害ゆえのことであろう。そういう意味では、こうした「負性」が筋骨の役目を担って、作品の主柱をしっかり支えているとも言える。

かつて、秋澤亙は、『日記』の構造について、脇役たちの各登場場面に注目し、この作品の脇役たちが主人公と帥宮をつねに孤絶にいたらしめるものとして機能していることを指摘した[4]。その上で、その孤絶感こそが二人の関係を成り立たせ、さらには和泉式部が『日記』を書く原動力になり得ていたことを説いている。小論も『日記』の脇役に焦点を当てながら、『日記』の構造を考察するものではあるが、秋澤の言う孤絶にいたらしめる脇役としてではなく、これらを「負性」と位置づける観点から、作品の推進力としての役割を炙り出そうとするものである。右に該当する事柄は数々あるが、今回は、紙幅の都合により、「故宮」、及び「帥宮の北の方」に絞って考察を試みる。

二　故宮の虚実

『日記』を読んで真っ先に覚える違和感は、この作品が主人公の故宮への追慕を通じて始発するにも関わらず、いつの間にか故宮の存在が掻き消されて、主人公と帥宮の恋に主軸がすり替えられている点ではないだろうか。『源氏物語』などを見ても、慕う相手に先立たれた人間は、喪失感や死者への追慕の情からなかなか抜け出せないでいる。たとえ男女間に身分差があった場合でも、そうしたこ

ととは無関係に、愛する人の死をにわかに受け入れられず、死の世界へ先立たれてしまったことへの後悔に明け暮れる。その種の感情は、物語の世界だけではなく、私たちの実生活でもしばしば体験するところである。

だが、『日記』における主人公と帥宮は、故宮の追慕に関して、あまりにも淡白ではなかっただろうか。主人公にとって故宮は、世間の非難を浴びつつも、最後まで思いを貫いてくれた恋の象徴だったはずである。なのに、その大切だったはずの相手を主人公が追慕する描写は、『日記』前半の一部に見られるのみで、後半は皆無といっていい。主人公と帥宮の恋の展開はあまりにも円滑に始動するが、それはその不自然さの犠牲の上に立って、初めて可能だったわけである。

今も述べたように、この作品の主軸を担うのは主人公と帥宮の関係であった。それを読み解く上で、その原点となった故宮の存在意義を考察することは、当然意味なしとしないであろう。作者にとって、故宮という存在はどのようなものであったか。また、なぜ故宮が途中から描かれなくなってしまったのか。作者が自在に取捨選択できたはずの「過去」に取材する日記文学特有の性質を踏まえて、ここではそれらのことを考えてみたいと思う。

まず、『日記』を紐解く前に、故宮（為尊親王）に関する史実的な概要を、実在の史料や他の作品を中心に押さえておく。『本朝皇胤紹運録』などによると、故宮は贈皇太后藤原超子[5]を母とする冷泉天皇の第三皇子であった。誕生は円融朝の貞元二年（九七七[6]）。帥宮（敦道親王）にとっては四歳年長の同母兄である。さらにその一歳上の同母兄に、貞元元年（九七六）生まれの居貞親王（『日記』中の「春宮」、後の三条天皇）がいる。

故宮は永祚元年（九八九）、十二歳の時に外祖父兼家の東三条殿南院の東の対で元服を行った（『小右記』同年十一月二十一日条[7]）。『大鏡』兼家伝や『栄花物語』「さまざまのよろこび」巻[8]には、兼家が超子腹の孫たちを格別にかわいがった旨が記されている。母親超子は悲運の后妃であり、帥宮を生んだ翌年の天元五年（九八二）に亡くなった。外祖父兼家の鍾愛は、母親を喪った外孫たちへの不憫さも一因であったろう。故宮は先に挙げた元服の年、すなわち永祚元年十二月二日に四品に叙せられ（『小右記』同日条）、さらに同年中に三品[10]、正暦四年（九九三）正月一日には、ついに二品へと進んだ[11]。四品叙位からわずかに三年足らずの栄達である。

故宮の通称の「弾正宮」は、弾正台の長官である弾正尹（従四位上相当）をつとめていたことに由来するが、上記の二品昇叙の正暦

四年以前には既にこの官に任じられている[12]。また、その後、「上野大守」兼帯へと格を下げられたものの、途中の段階では大宰帥（従三位相当）も兼ねていたという[13]。元服直後の親王としては、すさまじい厚遇である。

時の一条天皇は幼帝で、元服したのは故宮の翌年であった。しかも、この天皇には兄弟宮もなく、この当時は成年皇族が総じて少数である。そうした皇室の寂しい時代における特有の事情が、故宮にこの厚遇を許したのであろう。しかも、皇太子である兄の居貞親王との年齢差は、たった一歳であった。故宮の尊貴性はかなり高かったと考えてよい。故宮は数少ない成年皇族のうちでも、すぐれて格の高い親王として、貴族社会の期待を担っていたに違いないのである。ちなみに、故宮の兼官だった大宰帥が召し上げられて、「上野大守」に差し替えられた際に、後釜として任官にあずかったのが、この作品の男主人公である弟帥宮だったものと思われる。

右で強調しておきたいのは、この作品ではあっさりと忘れられてゆく故宮が、貴族社会においては、決して軽くない存在であったことであろう。しかし、故宮はその貴族社会で専ら重々しく崇拝されるだけの人間でもなかった。先に検証した元服前後の故宮の様子は、『大鏡』、『栄花物語』などにも垣間見ることができる。これらの作品の中で、故宮は容姿の美しさを称えられているものの、やはり賞賛一辺倒ではない。元服の時に少年用の角髪から成年用の髻に結い直した際に、見栄えが下がって、「御元服おとり」と評された記事（『大鏡』兼家伝）は著名であろう。この話が象徴するわけではなかろうが、故宮は、人から称えられる反面に、逆に見下される一面もあわせ持っていた印象が強かったように思われる。

不可解と言えば、故宮の結婚であったろう。故宮の正妻は一条摂政藤原伊尹の九の君であったという。伊尹は外祖父兼家の兄。つまり、故宮にとっては、母親の従妹に当たるのだが、これと結婚することになった経緯は少々ややこしく、それは『栄花物語』に詳しい。

かくておはしますも、さすがにあまえいたくや思されけん、わが御はらからの弾正宮を語らひきこえさせたまひて、この九の御方に婿取りきこえさせたまふ。あしからぬことなりとて、宮おはし通はせたまふ。九の御方、年月いみじき御道心にて、法華経二三千部と読ませたまひて、ただ明暮の御おこなひを、なかなかよろづ思さるべし。

（「みはてぬゆめ」193頁）

そもそも、伊尹の九の君は、異母兄の花山法皇がかりそめに通っていた相手であった（同上・191頁）。ところが、その侍女で、法皇

の乳母の娘でもあった「中務」なる女性に法皇が気持ちを移し、始末に困って、異母弟の故宮に九の君を押しつけることになったらしい。なのに、故宮は「あしからぬことなり」と何喰わぬ顔で承引し、九の君も九の君で、これを「婿取」ったというのであるから、普通の感覚ではにわかに理解しがたい話である。そのことを記すのが右の引用文であった。

もとより、故宮については、帥宮とともに、「この春宮の御弟の宮達は、少し軽々にぞおはしましし」（『大鏡』「兼家伝」247頁）とされており、「弾正宮いみじう色めかしうおはしまして、知る知らぬ分かぬ御心なり。世の中の騒がしきころ、夜夜中分かぬ御歩きもいとうしろめたげなり」（『栄花物語』「みはてぬゆめ」193頁）とも評されていて、恋愛の相手も選ばなければ、いつ何どきとも構わず女性の家に出入りするような剛の者と見られていた。そうした「夜歩き」が災いし、疫病を患って頓死する。

その故宮の薨去について、『権記』長保四年（一〇〇二）六月条に沿って、経過を追ってみたい。

①弾正宮御悩殊重、可出家、被申冷泉院云々、左相国参給云々、自由退出之後、心神乖例、仍不能参（五日）

②晩景参弾正宮、昨夕以前大僧正為沙弥戒師剃御頂云々、今夜剃下髪、帰家（六日）

③今夕詣弾正宮（九日）

④丑剋許惟弘来云、弾正宮薨給云々者、惟弘参入（十三日）

右に徴すれば、故宮は六月五日に病が深刻となり、延命のためか、死を覚悟したためかは分からないが、六日に剃髪を実行した。九日には病を推して寺に詣で、ついに十三日に薨じた。『日本紀略』に「六月某日、入道弾正尹二品為尊親王冷泉皇子、薨」とある「某日」は、右によれば、「十三日」である。『日記』の冒頭の「夢よりもはかなき世の中」は、ちょうどこの時期に交際を深めていた主人公が、あっけなく命を落とした故宮を憔悴の中で見送った経緯を指していることになるだろう。

故宮の薨去は、明らかに悲劇的なことなのに、先の『栄花物語』『大鏡』の語り口には、冷ややかな視線も感じられる。女性関係における軽率な一面が、故宮の評価に決定的な痛手を与えていたものであろう。この作品における故宮の忘却も、あるいはそうした点と無関係ではなかったのかも知れない。

三　故宮と作品展開

もっとも、故宮という人物の歴史的な実像は定まっていない。そもそも、主人公との接点がどのように生じたのかでさえ、学界の見解は満足に固まりきらないのである。従来は、冷泉天皇の皇后である昌子内親王が故宮の母代わりと思われており、また、『日記』の三条西家本（宮内庁書陵部蔵）の巻末注記が主人公の母親を、「太皇大后昌子乳母号介内侍」などとしていることから、そこを接点とした出会いであると見る考えが支配的であった。しかし、次に示すように、実母亡き後の故宮を養育したのは、叔母であり、かつ円融天皇の女御でもあった詮子であると見られ、昌子を介在させる説は既に大きく後退している。

藤岡忠美は、①為尊親王の母代わりが昌子ではなく、詮子であったこと、②歌集に為尊親王と和泉式部の関係を示す歌が明確に認められないこと、③勅撰集、『栄花物語』、『和泉式部日記』などに描かれる為尊親王との関係が必ずしも正確ではないということ、④交際可能期間が、長保二年の冬から三年の十月頃までの短期間であることなどを根拠に、従来の為尊親王と和泉式部の交渉を覆す論を提示した。[14]

一方で、木村正中は、『和泉式部集』の

世のいとさわがしきころ

六三八　はかなさにつけてぞなげく夢の世をみはてずなりし人によそへて

六三九　ものをのみ思ひしほどにはかなくてあさぢがすゑの世となりにけり

といった歌を和泉の為尊親王追悼歌として説き。[15]久保木寿子は、和泉の夫である橘道貞の周辺から二人の交渉を推し測っている。[16]いずれも藤岡忠美説に対する反証としての意味を持っているものと思われる。

小論は、それら双方の主張の当否に当座の関心はない。むしろ、ここで重視したいのは、そうした揺らぎがちな史実性をよそに、間違いなく、故宮が尊貴性に裏打ちされた存在であったという事実である。そして、そのような立場にあったはずの人物を、『日記』は遠慮会釈なく作品内に引っ張り込み、次にはあっさりと捨て去って、筋展開に奉仕させてみせた。恐ろしく乱暴な扱いである。

こうした失敬な扱いがなぜ可能だったのか。故宮は、主人公、帥宮、乳母らに思い返される形で、次のように作品に登場する。

① 夢よりもはかなき世の中を、嘆きわびつつ明かし暮らすほどに、四月十余日にもなりぬれば、木の下くらがりもてゆく。築土の上あをやかなるも、人はことに目もとどめぬを、あはれとながむるほどに、近き透垣のもとに人のけはひすれば、たれならむと思ふほどに、故宮にさぶらひし小舎人童なりけり。あはれにもののおぼゆるほどに来たれば、「などか久しく見えざりつる。遠ざかる昔のなごりにも思ふを」など言はすれば、（以下略）（9頁）

② 恋と言へば世のつねのとや思ふらむ今朝の心はたぐひだになし

御返り、

世のつねのこととともさらに思ほえずはじめてものを思ふ朝は

と聞こえても「あやしかりける身の有様かな、故宮のさばかりのたまはせしものを」とかなしくて、思ひ乱るるほどに、例の童来たり。御文あらむと思ふほどに、さもあらぬ心憂しと思ふほども、すきずきしや。（15頁）

③ 北の方も、例の人の仲のやうにこそおはしまさねど、夜ごとにいでむもあやしとおぼしめすべし。「故宮のはてまでそしられさせたまひしも、これによりてぞかし」とおぼしつつむも、ねんごろにはおぼされぬなめりかし。（16頁）

④ かろがろしき御歩きは、いと見苦しきことなり。そがなかにも、人々あまた来かよふ所なり。便なきことも出でまうで来なむ。すべてよくもあらぬことは、右近の尉なにがし始むることなり。故宮をも、これこそゐて歩きたてまつりしか。夜夜中と歩かせたまひては、よきことやはある。かかる御供に歩かむ人は、大殿にも申さむ。（24頁）

本文①は、言うまでもなく冒頭場面である。「夢よりもはかなき世の中を、嘆きわびつつ明かしくらす」という地の文で始まるのだが、

なぜ主人公は「夢よりもはかなき世の中」を嘆いてくらしているのかという疑問がすぐに浮上する。そこへ訪れたのが故宮に仕えていた小舎人童であった。この小舎人童の登場は、世の中の憂いに沈んでいた主人公の転機の訪れを、期せずして暗示する。こうした話の展開のありように関して、久保木寿子は「かなり新しい恋を主体に展開し始めている」と説くが[17]。確かに、主人公の視点の先や、小舎人童の登場、主人公と帥宮の間で交わされた歌[18]などの背景には、それらが主人公と帥宮の恋が始まるために配置されたものであるように見える。

主人公の視線の運びにも注意したい。「人はことに目もとどめぬ」「築土の上」を眺めており、その「近き透垣」に「人のけはひ」を察知する設定は、「小舎人童」が来訪するために構えられたものであるかのように映る。主人公は小舎人童に「遠ざかる昔のなごりにも思ふ」と語りかけており、この会話から主人公が日々嘆きながら暮していた所以を徐々に知ることができるしかけである。

だが、この冒頭部の「夢よりもはかなき世の中」の「世の中」について、また、故宮への追慕は、帥宮への追悼が二重写しにされているという見方もある。過去を回想して書くという「日記」の手法を踏まえると、この「世の中」が指す男女の仲は、一概に故宮との関係を示すものとはいえない。これから始まろうとする恋も、故宮との関係のように「はかな」いものであるというニュアンスを含んでいるように読むことができる。さまざまな過去を回想し、その時の感覚をじわじわと思い出しながら、心の中で訴えているような主人公の姿を浮かべることができる。

こうした主人公の錯綜した追慕について、秋澤亙は

冒頭に敦道親王の嘆きが投影していたとすれば、その作品構造は平板であり得ない。追慕されている人物がそのまま男主人公であるという奇妙な構図は、文学ならではの「ねじれ」であり、現実には起こり得ない虚構であった。冒頭に故宮追悼の共感を読んだ場合、その現実を超えて描かれる「女」の根元的な寂寥感が、筋立て上は故宮追悼という形に矮小化されることになる。

と論じている[20]。主人公は、恋人であった為尊親王の死により、残された人生を嘆きながら過ごしていた。そこへ、故宮に仕えていた小舎人童が訪れたのである。この来訪は、主人公が「嘆きわびつつ明かしくら」していた日々を変える出来事となった。小舎人童の来訪によって、新たな恋が始まったのである。

本文②は、主人公と帥宮が関係を結んだ後に戸惑う主人公の心情が描かれている。主人公は帥宮へ「世のつねのこととともさらに思ほえず」と歌を詠みかけたものの、故宮の「存在」を思い、自責するのである。しかし、それと直後に起こった童の来訪に対して、帥宮からの文を期待する態度を見せるなど、故宮と帥宮との間を揺れ動く主人公の心も看取される。故宮に思いを馳せながらも、帥宮との新たな恋に大きく気持ちが傾く主人公を、作品は「すきずきしや」と嘲っているが、それは客観的な目というよりは、主人公自身の自己嫌悪の思いであろう。「すきずきしや」と自分をなじりながら、主人公は帥宮との関係を断ち切ろうとはせず、逆に訪れた好機にもたれかかろうとしているのである。

文を交わすようになった後、二人は心が打ち解ける時間を置かず、興味が先立って、急速に対面することとなった。夜更けの男女の邂逅が、会話のみで終わるはずはなかろう。偶発を装って、主人公は帥宮を御簾の中へ入れる。勢いに乗じて結ばれた関係を省みて、主人公は「故宮のさばかりのたまはせしものを」と過去の故宮に思いを致す。ただし、この際の故宮が、帥宮との新たな恋に対する規制力となっていない点には注意を要するであろう。主人公は故宮の存在を忘れはしない。忘れはしないが、その思いは脳裏をかすめる程度で留まっている。故宮は、主人公を引き留める存在としては、既に機能していないことになる。

それに対して、③はどうであろう。作品上、北の方の存在が初めて示される箇所である。帥宮にとって、北の方は昵懇な妻ではなかった、という。だが、帥宮はその意向を気に病み、主人公への通いを思い留まる。北の方はこの作品において主人公たちに重くのしかかる巨大な負性を形成するのだが、その点については次章で触れる。

北の方と同様、この記事で故宮の存在が帥宮の気持ちを引き留める経緯は無視できまい。故宮は主人公との関係ゆえに、「はてまでそしられさせたま」うた、とされている。要は、貴族社会から白眼視されたということであろう。その二の舞はすまいという思いが、先の北の方への配慮と相俟って、帥宮に主人公との交際を躊躇させる。兄宮を表に立てて近づきながら、主人公と実際に関係を持ってみれば、同じ目に会いそうな予感が沸き、それが重荷となって、動揺する。何とも腰の座らない話であるが、ここでの故宮は、その帥宮の行動を規制する見事な負性として働いている。その意味で、先の②の記事において、主人公が故宮を思いながらも、それが何の役にも立たなかったことと大きく異なる。帥宮のこの自制は、主人公が心密かに期待したはずの三日夜通いの頓挫を生み[21]、この恋に甚大

な痛手を与えた。故宮は、主人公の直接の規制力にはならなかったが、帥宮の思いを通じて、恋の進展を大きく阻む存在となっていたのである。

そうした観点では、④も同様であろう。これは帥宮に対する帥宮の乳母の諫言の一部である。乳母は主人公と関係を持つことが、どれほど「便なきこと」であるかを帥宮に強く訴えかける。「人々あまた来かよ」う主人公のもとへ出かけようとする帥宮を、乳母はどうしてもやめさせたい。帥宮の将来を左右しそうだからである。主人公などと付き合っていると、ろくなことはない。その際に、やはり故宮のことが取り沙汰された点には、気をつけなくてはならない。乳母は、それさえ持ち出せば、帥宮が自重すると思ったのであろう。実際に②の場面において、帥宮自身が同様のことを想起して通いをやめた点は、先にも確認している。主人公との交際は、帥宮にとって自滅を招来しかねない危険な火遊びなのであり、そのための反面教師が兄の故宮であった。故宮が、この作品の初期において、大きな負性となっていることは、以上の記事からも明らかであろう。

そうした一方で、例えば、①の場面に戻ってみると、主人公のもとへ訪れる小舎人童には、故宮の影が見え隠れしていた。主人公にとって、小舎人童は作品の前史に当たる時期に、故宮と自分とを仲立ちしてくれた、大切な媒介者だったのである。小舎人童の来訪は、主人公と帥宮の「物語」の始発を意味するだけでなく、冒頭に描かれる主人公が悲嘆に暮れるわけを作品上に匂わせる重要な意味を持っている。冒頭場面について三田村雅子は、

主人を乗りかえる小舎人童と、恋人を乗りかえる和泉式部の両者が対位法的に配置されている

と指摘している[22]。つまり、「故宮にさぶらひし小舎人童」が、今は「帥の宮に参」る状況と、主人公が故宮を失った悲しみから帥宮への新しい恋の人生へ転換しようとする二人の構図となっている。故宮は、確かに二人の恋を規制する負性にほかならないが、その反面で、主人公たちを結びつける契機として、正反対の意味も有していたことになる。

故宮追慕の共感は、作品の始発はおろか、筋の進展のためにも非常に重要であった[23]。小町谷照彦は、故宮の存在について、「敦道親王を舞台に登場させるためにはそれに代わるものが必要であ」ったした上で、「橘の花」を「記号としての自然」とし、「橘の花」が記号性を発揮するために」「為尊親王が愛の虚像として存在し得たのは、実に記号としての自然の多重的複合によって初めて可能だった」

と述べている[24]。

故宮には、『源氏物語』における光源氏のように、中心人物としての存在感はない。また、誰かに「形代」を背負わせるような生きた証もなかった。だが、『日記』の冒頭が、あたかも「中心不在の世界[25]」であるがごとく主人公の悲嘆に暮れる姿を描き、その中心人物の「形代」として故宮を登場させたところに、故宮の存在に違和を感じさせるのではないだろうか。しかし、それはあまりにも故宮という人物に中心人物としての役割や、主人公の重要な恋人として、読者はその存在に期待し過ぎている面もある。

ただし、それは読者の誤読でも偏見でもない。おそらく『日記』の冒頭の描かれ方に問題があるに違いない。それは言い換えれば、この作品の「ゆかり」としての帥宮と故宮の関係が「屈折した形」をとっているということになる。秋澤亙が、

「ゆかり」として登場した帥宮が、その「ゆかり」ならざる道を歩むことによって、昔の故宮を超える存在に成長する。亡き人の再来ではあっても、再来に終わらない[26]

と論じているように、故宮の存在を超えた帥宮が存在することで、故宮の存在は薄れてしまう。こうした現象は「物語」的な見方からすると、具合の悪さを感じてしまうが、「日記」においてはこうした故宮の存在性や主人公の思惟の矛盾が、ひとつの意味を帯びてくる。

これは「日記」という、作者の介入が認められている虚構の文学空間だからこそ、起こり得る現象ではないだろうか。冒頭に描かれる主人公の様子、そして帥宮の登場、また帥宮との恋にためらう主人公の後ろめたさはすべて故宮の存在が所以である。しかし、前半部で掲げられたそうした問題は、徐々に宙吊りにされ、最後には別次元の問題が主となり、覆い隠されてしまう。このような中途半端な描かれ方や人物の位置付けにこそ、作者の一筋縄では解決できない「過去」の、どうしようもできない心中が窺えるように思われる。

帥宮の登場のきっかけや恋の始発を促すものとしては故宮の存在がなくてならず、作者は「物語」的な方法に加担しているように見受けられる。しかし、結局は、作者という、生きている者から便宜的に利用されてしまう故宮なのである。

四　北の方の行方

確認してきたように、この作品の主人公と帥宮の関係は、幾多の他者を排除したところに成り立っている。この種の排除されるべき他者たちを、小論では「負性」と呼んでいるわけであるが、見てきた通り、故宮はその最たるものであった。しかし、他方、故宮が二人を結びつける重要な存在でもあったことは、繰り返し反芻されなければならないだろう。故宮は作品上正反対の意味を具備する両義的な存在なのである。

主人公たち二人は、当座、恋の世界を生きることによって、現実に巻き起こる問題を避けてきた。しかし、そうした閉鎖的な場にも、現実社会の問題が絶えず割り込んで、そこに介入しようとしてくる。恋の世界における陶酔と、それを許さない現実とのせめぎ合いによって、この日記の作品空間は成り立っていると言える。結局、二人は次々に介入してくる現実を排除しきれなくなって、大きな決断をせざるをえなくなる。それが主人公の「宮邸入り」という、極めて過激な方策であった。多くの排除しきれなくなった現実のうちでも、最も象徴的にそれを示すのが、帥宮における北の方との関係だったと見てよいだろう。

北の方は、帥宮に「例の人の仲のやうにこそおはしまさねど」（16頁・前出）と思われているように、主人公の存在とは無関係に、世間並みの夫婦仲ではなかったが、かと言って、破綻寸前の状態にあったわけでもない。ところが、最終的に、この人は主人公の宮邸入りを受けて、帥宮との離別を余儀なくされる。客観視すれば、主人公たちの身勝手な恋の哀れな犠牲者である。しかし、作品上は気の毒な存在でも何でもなく、この人こそが二人の恋における最大級の邪魔者として描かれる。「負性」という意味では、先の故宮以上の存在感を有しているかも知れない。また、故宮を排除することで始まる冒頭との関係で言えば、この人物の排除で作品が終わるのだから、両者は作品首尾の双方をそれぞれが担う「負性」の代表的な存在であったとも言えよう。

この北の方の実在は、藤原済時二女である。姉に娍子という人物がおり、それは帥宮の同母兄である春宮居貞の女御であった。この女御も、二人の恋の前に立ちはだかる強大な宿敵として、作品の最後の方にやおら登場する。兄と姉、弟と妹という、固い血の絆で結ばれた二組の夫婦のうちの片方に、決定的なひびを入れてしまうのであるから、宮邸入りが貴族社会の秩序に対する大胆な挑戦と受け

止められてもしかたあるまい。

北の方との離別は、当時の貴族社会の関心を大いに掻き立てたらしく、『大鏡』や『栄花物語』にも取り上げられている。『大鏡』「師尹伝」には、

また、いま一所の女君は、父殿うせたまひにし後、御心わざに、冷泉院の四の親王、帥宮と申す御上にて、二三年ばかりおはせしほどに、宮、和泉式部に思しうつりにしかば、本意なくて、小一条に帰らせたまひにし後、この頃聞けば、心えぬ有様の、ことのほかなるにてこそおはすなれ。（123頁）

とある。帥宮との結婚が北の方の希望であったことと、宮邸からの退去は、帥宮が和泉式部に心変わりをしたためだとし、不本意にも小一条に帰ったことが記されている。

『栄花物語』「はつはな」にも同様に、

小一条の中の君と聞ゆるは、宣耀殿の御弟の君、殿も上も、ともかうもなさでうせたまひにしかば、いかで女御殿に劣らぬさまのことをなど思しかまへて、東宮の御弟の帥宮に聞えつけたまへりしかば、南院に迎へたまへりしかど、年月に添へて御心ざし浅うなりもていきて、和泉守道貞が妻を思し騒ぎて、この君をばことのほかに思したりしかば、居わづらひて、小一条の祖母北の方の御もとに帰りたまひにしぞかし。（454・455頁）

とあった。帥宮との結婚はみずからの目指すところだったようであり、さらに、帥宮が和泉式部に夢中になって、北の方に振り向くことなく、居づらくなったために退去したことが記されている。『日記』以外の作品で見られる北の方の退去は、北の方が帥宮と主人公に一方的に退けられた形となっている。

こうした歴史物語類の物言いは、『日記』で語られる状況とは若干異なる。主人公を宮邸に迎え入れた帥宮は、これを北の対に移し、本格的に処遇しようとする。それを見て驚いた女房たちは、その事情を北の方にご注進する。

二日ばかりありて、北の対にわたらせ給ふべければ、人々おどろきて、上に聞こゆれば、「かかることなくてだにあやしかりつるを、

なにのかたき人にもあらず。かくとのたまはせで、わざとおぼせばこそ、忍びて率ておはしたらめ」とおぼすに心づきなくて、例よりもものむつかしげにおぼしておはすれば、いとほしくて、しばしは内に入らせ給はで、人の言ふことも聞きにくし、人の気色もいとほしうて、こなたにおはします。

（82頁）

北の方は主人公を「なにのかたき人にもあらず」と軽侮し、主人公を「忍び」て連れてきた帥宮の行動に、思いの深さを感取する。「忍び」て連れてきたのは、事前に人に知られて、諫止されないためであろう。以前と同様の忍ぶ関係が貫かれなくては、宮邸入りは不可能だった。しかし、それはそこまでしても帥宮が主人公の宮邸入りを望んだことを意味する。北の方は、帥宮の行動に思いの深さを悟ったのである。

ところで、帥宮は主人公とのやりとりで次のように述べていた。

「今、かの北の方にわたしたてまつらん。ここには近ければ、ゆかしげなし」とのたまはすれば、「それをなん思ひ給ふる」と聞こえさすれば、笑はせ給ひて、「まめやかには、夜などあなたにあらん折は、用意し給へ。けしからぬものなどは、のぞきもする。今しばしあらば、かの宣旨のある方にもおはしておはせ。おぼろげにてあなたは人もより来ず。そこにも」などのたまはせて、

（81頁）

宮邸入りを果たした主人公に対して、帥宮がその後の注意を促すのである。皮肉にも、これが『日記』で見られる主人公と帥宮の間で交わされる最後の会話であった。宮邸入り後には二人の間で歌が一首も詠み合われない。それは「贈答歌を主軸とする微妙な恋愛心理のあや[27]」が主題だった『日記』の変質を意味していた。もはや、二人の関係は、和歌の虚構世界で成り立つそれではなくなっている。そのことは、和歌はおろか、二人の間の会話さえも封殺する現実世界の厳しさを暗示するものであったろう。

「しかじかのことあなるは、などかのたまはせぬ。制し聞こゆべきにもあらず。いとかう、身の人げなく人笑はれに恥づかしかるべきこと」と泣く泣く聞こえ給へば、「人つかはんからに、御おぼえのなかるべきことかは。御気色あしきにしたがひて、中将などがにくげに思ひたるむつかしさに、頭などもけづらせんとて、呼びたるなり。こなたなどにも召し使はせ給へかし」など聞こえ給へば、いと心づきなくおぼせど、ものものたまはず。

（82頁）

北の方は、自分に何の相談もなく事が進められたことを難じ、「泣く泣」く不満を訴える。この「泣く泣く」は、現代語のように、泣きたいような思いで何かをすることとは異なり、「泣きながら」の意味である。つまり、実際に涙を流して泣いている。それに対して、帥宮は、相手方に責任を押しつけながら、のらりくらりと言い抜ける。帥宮は北の方に主人公を「召し使はせ給へかし」と言った。女房として召したのであって、妻ではない。だから、一緒に召し使おうと言うのである。

近藤みゆきは、「女があくまで女房の立場であることを強調し、北の方の不満を女主人としての心構えという点からなだめようとした」とする[28]。帥宮の小ずるさがありありと窺えるだろう。しかし、主人公は、妻になるつもりで宮邸に来たのではなかった。女房としての扱いであると最初から分かっていた。だからこそ、主人公は作品の後半部でずっと宮邸入りを迷ってきたのである。帥宮の論法は、私たちにはずるい言い訳に見えるが、それは本当のことに過ぎない。そして、それこそがこの恋の終着点だった。右の会話は現実的な主人公の立場を的確に表している。

ここで北の方の涙する姿が描かれている点には注意したい。北の方はこれまで二人の恋とは距離を置く遠景のような存在として描かれてきたが、この帥宮との会話で初めて、苦境に涙する生きた姿が大写しで示される。強大な存在感として文脈の裏に影を潜めていた北の方が、ついに生々しい全貌をあらわにしたのである。だが、それは存在感の大きさから予期されるような力強い女性像ではなかった。さめざめと泣くばかりの弱々しい姿である。夫を咎めても、泣くしかない。二人の関係を陰に陽に脅かしてきた大きな障壁が、かほど矮小に描かれるものなのか。女房風情の主人公に敗れ去った惨めさが、この泣く姿に象徴されているようにさえ思われる。しかし、その泣いた姿に帥宮がほだされることもない。そこがさらに一層の惨めさを私たちに印象づけるのである。

北の方は、院の拝礼の記事の後に宮邸を去る。その際に登場する大物が、北の方の姉に当たる春宮の女御であった。先にも少し触れたが、実在としては、藤原済時長女の娍子という女性である。当時の皇太子だった居貞親王（春宮）の女御であり、居貞は帥宮の同母兄であった。この夫婦は帥宮が最も恐れる人物たちだったと考えてよいであろう。

北の方の御姉、春宮の女御にてさぶらひ給ふ、里にものし給ふほどにて、御文あり。「いかにぞ。このごろ人の言ふはまことか。われさへ人げなくなんおぼゆる。夜のまにもわたらせ給へかし」とあるを、「かからぬことだに人は言ふ」とおぼすに、いと心憂

くて、御返り、「うけたまはりぬ。いつも思ふさまにもあらぬ世の中の、このごろは見苦しきことさへ侍りてなん、あからさまにも参りて、宮たちをも見たてまつり、心もなぐさめ侍らんと思ひ給ふる。迎へにたまはせよ。これよりも。耳に聞き入れ侍らじと思ひて」など聞こえさせ給ひて、さるべきものなどとりしたためさせ給ふ。（84頁）

北の方は女房たちの告げ口にも無言で耐えていたが、姉からの文には本音を漏らす。帥宮との関係をあきらめるべく、宮邸を去ろうとするのである。これ以上、何も聞たくないからだ。

この北の方の態度は主体的であろう。多くの読者は、主人公たち二人が北の方を追い出したかのように誤解しているが、実際には、北の方はみずから出ていったのである。受身ではない女性の姿がそこには描かれている。主人公が女房扱いと知りながら、宮邸に入ったのも、逡巡した末の主体的な行動だった。一方、それを受けて宮邸を去る北の方の判断も、実は主体的だったのである。この人たちは優柔不断な帥宮に翻弄されつつも、みずからの意思できちんと行動している。この作品はそうした平安女性の主体性を描くにも余念がなかったことになる。

むつかしき所などかきはらはせなどせさせ給ひて、「しばしかしこにあらん。かくて居たればあぢきなく、こなたへもさし出で給はぬも苦しうおぼえ給ふらん」とのたまふに、「いとぞあさましきや。世の中の人のあさみ聞こゆることよ」「参りけるにも、おはしまいてこそ迎えさせ給ひけれ、すべて目もあやにこそ」「かの御局に侍るぞかし。昼も三たび四たびおはしますなり」「いとよく、しばしこらし聞こえさせ給へ、あまりもの聞こえさせ給はねば」などにくみあへるに、御心いとつらうおぼえ給ふ。

「さもあらばあれ、近うだに見聞こえじ」とて、「御迎へに」と聞こえさせ給へれば、御せうとの君達、「女御殿の御迎へに」と聞こえ給へれば、さおぼしたり。（85頁）

女房たちが帥宮と主人公を非難する中、北の方の退去の準備は進む。「などにくみあへる」と書かれているのは、女房たちの会話の総体である。先の記事にあるように、北の方は「耳に聞き入れ侍らじ」と思っていた。にも関わらず、逆に女房たちの会話が耳うるさく聞こえるという皮肉である。北の方と、それに肩入れする女房たちは、同志でありながら、対極の関係に置かれている。そして、そのことがこれらの女房たちの態度を滑稽にも見せる。宮邸を退去する北の方の振り切る女房たちの声は、あたかもこれを宮邸退去へと

追い込んでゆく雑音であるかのようも感じられた。

この一連の経過を、主人公はただ傍観していた。紛れもない『日記』の主人公であったこの女性は、ただ指をくわえて成り行きを見ているだけの脇役に、最後は転じてしまうのである。

聞こえさわぐを見るにも、いとほしう苦しけれど、とかく言ふべきにならねば、ただ聞きにくきころ、「しばしまかり出でなばや」と思へど、それもうたてあるべければ、たださぶらふも、なほもの思ひ絶ゆまじき身かなと思ふ。（86頁）

主人公が立場上何もできることがなかった事情は分かる。しかし、「いとほしう苦し」いと心内で思いながらも、北の方の退去に向かって事態が進んでいる現実に、落胆を覚えていたということはあるまい。自分自身の身を、「もの思ひ絶ゆまじき」と思い、その宿世を甘受して何も言わずに黙っていれば、自分にとって都合のよい事態に流れてくれる。そうしたご都合主義の沈黙の中で、最大の負性である北の方が排除され、作品が完結する形である。

宮、入らせ給へば、さりげなくておはす。「まことにや、女御殿へわたらせ給ふと聞くは。など車のこともものたまはぬに」と聞こえ給へば、「なにか。あれより、とてありつれば」とて、ものものたまはず。（86頁）

作品掉尾の記載であるが、右には転じて北の方の沈黙が描かれる。ここで帥宮が北の方に出て行く事情を尋ねるのは、いささか白々しく、不自然のようでもある。宮邸入り後に、主人公が傍観者と化した経緯については前述した。ここでは、帥宮が傍観者のようになって、北の方に事情を尋ねるのである。それに対して、今度は北の方が沈黙する。近藤みゆきの指摘するように、文や歌、会話などの「ことば」によって心のつながりを深めてきた主人公と帥宮との関係とは対照的に、北の方の沈黙が描かれていると言えるだろう。[29] だが、それは宮邸入り後の主人公の沈黙とは似て非なるそれである。

右に見えるように、この作品は、「宮の上御文書き、女御殿の御ことば、さしもあらじ、書きなしなめり、と本に」（86頁）と締め括られる。末尾に関しては、さまざまな問題が潜在しているが、小論では、この末尾が、『日記』の冒頭部にあらわれる、作者の世の中を憂える境地と通じると解したい。それは、日記がこの一連の結末を全て見通して書かれたことを前提とするが、過去を回想して描いてきた作者が、事実を操作することなど不可能で、全てが必然であるということを思い知る境地が示されていると思われるからである。

この末尾の部分の「と本に」の箇所は本を書き写した者の一言である可能性も高いが、「さしもあらじ、書きなしなめり」という叙述の部分は、宮邸入り後に沈黙をし、現実を見てきた主人公の境地であるとも言える。つまり、主人公の叙述と作者の「一人称語り」が融合された叙述ということであろう。みずからを主人公にして描いてきた『日記』の最後の顚末として、過去の必然を悟る作者の胸中を語ったものと見たいのである。

北の方は、これまで主人公とは対照的に、沈黙を貫き、無関心に徹する女性として描かれていた。しかし、主人公が宮邸に入る時点で急に口を開く。最後まで帥宮とは真意を語ることはないが、沈黙を続け、主人公と帥宮の恋の話の端に追いやられた女性が、最後の場面になって口を開き、自分から邸を去る決断をして出て行くところに、北の方という一人の平安人の主体性が表れていると言える。

『日記』の叙述から除外されていた女性の意志が、最後の場面で描かれた意味は小さくない。北の方は帥宮の正妻でありながら、帥宮のもとに留まらず、退去という形で一つの行き場を見つけたのである。退去という体をとって帥宮との関係に終止符を打った北の方の存在と、主人公の存在は実に対照的に配置されている。

作品初頭に強大な負性として登場した北の方は、最後は排除される人間として、大きく脚光を浴びる。そして、その排除によって、帥宮と主人公の恋は一つの終着にたどりつくのである。その意味では、巨大な障壁であったはずの北の方が、最後は自身が退くことで、二人を堅牢に結びつけてくれたことになる。負性でありながら、結果的に主人公たちをつなぎ固める存在でもあったのであり、先に見た故宮とはまた別の意味において、この北の方も、負性一辺倒でない両義的な役割の存在だったと見ることができるように思われる。

小論では、「負性」なる視点を用いることによって、恋の障害であるかのように思われていた幾多の登場人物たちが、実はふたりの恋を深く結びつけるための役目を担っているという、従来の読みでは見えていなかった文脈を明らかにしたつもりである。そしてそれは、一人称であるべき主人公を三人称に据え、和泉式部と敦道親王の恋を客観的な視座で記すことを目指した、この作品ならではの方法によって初めて可能だった、一つの達成であったように思われる。

---

1 『和泉式部日記』の引用・頁数は、近藤みゆき『角川ソフィア文庫』（二〇〇三）による。

2 円地文子・鈴木一雄『全講 和泉式部日記』（至文堂・初版／一九六五、改訂版／一九八三）

3 小嶋菜温子「負性」（『國文學〈解釈と教材の研究〉キーワード100古典文学の術語集 第40巻9号 臨時増刊』學燈社・一九九五・10）

4 秋澤亙「孤絶の構造―脇役から見た『和泉式部日記』―」（『野州國文學〈第四十九号〉』一九九二・3）

5 『紹運録』『尊卑分脈』『〈三条西家本〉和泉式部日記』（巻末注記）は「贈后」「贈皇后宮」などとするが、『日本紀略』『中右記』『大鏡裏書』『百練抄』などは「贈皇太后」とする。「贈皇太后」の可能性が高いと見る。

6 『権記』長保四年（一〇〇二）六月十五日条の為尊薨去関連記事「年廿六」から逆算。

7 『日本紀略』は「二条第」とするが、『小右記』の方が史料としての信頼性が高い。

8 『大鏡』の引用・頁数は『新編 日本古典文学全集』（小学館・一九九六）による。

9 『栄花物語』の引用・頁数は『新編 日本古典文学全集』（小学館・一九九五～八）による。

10 注6の『権記』同日条。ひと月の間に初叙と昇叙が一瞬にして行われたことになるため、森田兼吉『和泉式部日記論攷 第二』（笠間書院、一九八八年、一八八頁）は当該記事の信憑性をいぶかっている。

11 『小右記』正暦四年（九九三）正月一日条に、「左親王為尊弾尹、忽叙二品云」とある。

12 注11参照。

13 注6の『権記』同日条。

14 藤岡忠美「和泉式部伝の修正―為尊親王をめぐって―」（『文学』岩波書店、一九七六・11）／「和泉式部の「生」―和泉式部伝の現状と課題」（『論集和泉式部』和歌文学会、笠間書院、一九八八・9）

15 木村正中「和泉式部日記形成論―その冒頭をめぐって―」（『源氏物語と女流日記研究と資料』古代文学論叢第五輯、一九七六・11）

16 久保木寿子『実存を見つめる和泉式部』（新典社、二〇〇〇・5）

17 前掲注16に同じ。

18 主人公の「薫る香によそふるよりはほととぎす聞かばやおなじ声やしたると」の歌と、帥宮の「おなじ枝に鳴きつつをりしほととぎす声は変わらぬもの

と知らずや」の歌。

19 遠藤嘉基『和泉式部日記（日本古典文学大系）』「解説」（岩波書店、一九五七）

20 秋澤亙「ゆかり」の文学としての『和泉式部日記』―故宮の存在意義をめぐって―（「活水日文35」活水学院日本文学会、一九九七・12）

21 清水好子「和泉式部日記の基調」（「関西大学国文学」一九七七・9）

22 三田村雅子『和泉式部日記（日本の文学 古典編）』（ほるぷ出版・一九八八）

23 高田祐彦が「〈座談会〉『日本文学と恋』」において『日記』の冒頭を扱い、恋の始まりと終わりの数々のパターンを述べている。そこで、「死者である為尊親王を追慕するという、共感をもとに恋の関係に踏み込んで」いくことを指摘している。（『文学』岩波書店、二〇〇七・9、10）

24 小町谷照彦「和泉式部日記◇表現の論理」（秋山虔編『王朝女流日記必携』学燈社・一九八九）

25 神田龍身「分身、差異への欲望」（『物語文学、その解体―『源氏物語』「宇治十帖」以降』有精堂・一九九二）

26 注20に同じ。

27 注1の書。

28 注1に同じ。

29 注1に同じ。